

第6回企画展「NOBORITO 1945 —登戸研究所 70年前の真実—」記録

企画展記念第三回講演会 長野県に疎開した登戸研究所と高校生たちとの調査

館長挨拶 山田朗（文学部教授）

本日は当資料館の企画展記念講演会にお越しいただきまして誠にありがとうございます。資料館もおかげさまでこの3月末に開館6年を迎え、間もなく通算5万人の来館者を達成します。

本日は登戸研究所の最初の重要な調査をされました、木下健蔵先生にお話いただきます。木下先生は1980年代、長野県^{あかほ}赤穂高等学校の教諭で、同校平和ゼミナールの顧問として高校生達と共に、戦争末期に長野県に疎開をした登戸研究所について調査をされていらっしゃいました。現在〔講演時〕、長野県辰野高校の教諭をされています。ご著書の『消された秘密戦研究所』⁽¹⁾は、登戸研究所についての総合的な研究の最初の本です。現在でも私たちは木下先生のご著書によく学びながら展示をさせて頂いております。

それでは木下先生、よろしく願いいたします。

第一部 講演「長野県に疎開した登戸研究所と高校生達との調査」

〔講師〕木下健蔵氏（長野県辰野高等学校教諭[※]） ※2016年3月26日の講演当時

はじめに

ご紹介いただきました木下でございます。今日は25年以上前に高校生達と共にいろいろ調べたことを中心に話したいと思います。

最初に調査を始めた高校生たちの、次の年代の高校生たちが、当時の関係者の伴繁雄さんですとか、そのほかへ行った様子が信越放送で特集番組⁽²⁾として放送されました。地方の番組で全国放送ではありませんが、高校生たちがどのような活動をしていたかがよくわかる内容になっています。

今の生徒たちと違いまして、当時の高校生達は非常にしっかりしたことを番組内で言うのですが、最初の頃はごく普通の生徒でした。それがなぜ変わったかという、聞き取り調査をしていく中において、いろいろと学び、考えが深くなっていったからだと思います。

1. 赤穂高校平和ゼミナール

(1) 赤穂高校平和ゼミナールの活動

私は社会科の教員ではなく、簿記を担当している商業科の教員です。一般的な歴史の知識もごく普通のものでした。偶然に赤穂高校で、私が平和教育の担当になっていたこともあり、授業を教えていた生徒会役員の春日（現・北原）いづみさんから「今年の文化祭で登戸のことを発表したいから手伝ってください」と言われました。「登戸って何？」というのが、私が彼女に最初に言った言葉です。私は登戸研究所のことは全く知りませんでした。ましてやこの場所（明治大学生田キャンパスのある川崎市多摩区）の地名だということも知りませんでした。当時は文化祭はお祭りのようになっていて、文化的な展示は少なかった。そこで、こういうことを発表するなら良いのではないかとということで、私も手伝いました。

駒ヶ根は田舎で交通の便が悪いものですから、毎日私の車に乗って調査に行きました。その結果を文化祭で発表しました。新聞とかを調べ、聞き取り調査をしていくなかで、お二人の名前が出てきました。その一人が伴繁雄さん、もう一人が杉山圭一さんという方です。「この二人は元将校で登戸研究所のことは良く知っている。だけど絶対話さないよ」と聞き取りをした人から言われました。伴さんは神奈川県葉山が自宅ですが長野県駒ヶ根市東伊那に別荘を持っていて年に何回か来ると聞いたので、伴さんのところへ何度か行きました。当然、最初はおまかされて話をしてくれませんでした。それでも高校生たちが大勢で行って話を聞くと、だんだん分かってくれて、当時のことを話してくれるようになりました。私一人で行ったら話してくれなかったと思います

(2) 法政二高・川崎市民との交流会

こうした活動をしているうちに、川崎でも高校生たちが登戸研究所のことを研究しているということが分かりました。私から法政第二高校の渡辺賢二先生に電話をしたところ、それでは交流しましょう、ということになりました。最初は赤穂高校で、そのあと私たちが川崎に行って川崎市民の方や高校生たちと一緒に交流会をしました。このことが新聞などで報じられると、関係者から連絡がきて、当時のことを話してくれるようになりました。

(3) 川崎市での登戸研究所の展示

文化祭で調べたことやその後の調査などをまとめた資料を手作りの冊子⁽³⁾にして発表しました。それがテレビに取り上げられて反響を呼び、色々な方たちが情報を寄せてくれるようになりました。その研究成果を川崎市で発表しています。

(4) 石井式濾過管の発見

活動のなかで一番大きかったことは、伴さんにお会いできたことです。伴さんは一切話さないといい、私たちが行ってもなかなか話をしてくれませんでした。毎日、高校生たちが文化祭で発表したいので話を聞きたい、別に何の意図があるわけではないと言って話を伺いに行きました。大人が聞きに来ると、何らかの意図があって恣意的な質問をする、と、伴さんはとても警戒していました。しかし、高校生たちは何も知らないし、伴さんのことや登戸研究所のことを話して欲しいと本当に純粋な気持ちでいると、伴さんもだんだん話をしてくれるようになって、資料も提供してくれるようになりました。

ある時、伴さんが庭に案内してくれて、筒みたいなものを見せてくれました。きれいな筒だったので、戦時中のもとは思えませんでした、「軍事秘密」という刻印がある。伴さんに「これは何ですか」と聞いたところ、「731部隊の石井四郎が使っていた濾過フィルターで、水を濾過するための筒だ。登戸研究所に払い下げてもらった」ということを話してくれました。当時は、何に使うのかということあまり良くわかっていませんでしたが、きれいな水を作ることだけは分かりました。

濾過筒には「ニホンロスイキ」という刻印がありましたので、私は日本濾水機の社長さんへ手紙を書いたところ、社長さんから丁寧な手紙をいただきました。手紙にはいつ特許を取ったかとか、構造的にはどういうものであるかとか、そして会社には当時の濾水機がある、ということが書いてありました。濾水機の使い方は、この濾過筒を5～6本、濾水機の装置に入れて、圧力をかけて水をきれいに濾すというものです。731部隊は人体実験などで有名になってしまいましたが、もともとは関東軍防疫給水部といって、濾水機を使ってきれいな水を作るための部隊でした。

(5) 実験器具等の発見

長野に登戸研究所が来たという証拠が無かったものですから、手っ取り早いところで『駒ヶ根市誌』⁽⁴⁾にはどのように書かれているかを探しました。ところが登戸研究所のことはたった4行しか書いてありません。戦争末期に来て研究をしていたと、その程度の本当に簡単なものだったので、他に資料がないかと探しました。

伴さんから、疎開した登戸研究所は中沢小学校が中心になっていたと聞きました。中沢小学校に行って何か当時の資料は残っていないか教頭先生に聞いたところ、学校日誌が残っているということでした。その学校日誌を調べたところ、登戸研究所の所員や関係者が疎開してきたという文章がありました。登戸研究所が確実に来ているということがその日誌から分かりました。その日誌に、戦後、小学校へ実験器具を寄贈したという記述を見つけました。そこで、「そういう記述があるのだけれども、実験器具のようなものはありませんか」と教頭先生に聞いた

ところ、「屋上の倉庫の中に何か古い器具があって、これはちょっと小学校では使わないものだからそれかもしれない」ということで見せてもらいました。ただ、それが登戸で使ったものであるかどうかは分かりませんので、関係者に尋ねることにしました。

伴さんは長野には夏の間滞在するだけなので、夏を過ぎるといけません。他に登戸研究所の関係者は杉山さんしかいません。杉山さんも将校の方で、元々東京出身で薬剤師の方ですが、唯一駒ヶ根市に残られて、山奥でカボチャを作りながらひっそりと住んでいました。誰に聞いても「杉山さんは登戸研究所のことは絶対話さないよ」と言われました。登戸研究所の将校だったということはみんな知っているのですが、どんなに親しい人でも「登戸研究所のことを話しているのを聞いたことがない、絶対無理だよ」と言われました。私達は杉山さんを訪ねて行きましたが、最初は関係のない話ばかりしていました。でもそこが生徒たちのすごいところで、諦めずに何度も行って人間関係を先に作って行く。とにかく大人はその内容を聞きたいといいますが、生徒たちは人間関係を作っていく、そこから話してもらえることを聞こうという態度だったので、杉山さんも次第に話をしてくれるようになりました。毒物のセクションにいたこと、色々な実験をしたことを話してくれるようになりました。具体的に人体実験のことは言いませんでしたが、「何人かは南京に行って実験をした」ということも話してくれました。先程の実験器具を杉山さんに見ていただいたところ、これは間違いなく登戸研究所で使っていたものだとおっしゃいました。こうして初めて登戸研究所の具体的な資料が出てきました。

これは生徒たちが根気よく何回も訪ねて、人間関係を作ったおかげです。先程紹介した番組の中で、生徒たちが人体実験については聞けなかったという場面があります。私が生徒たちに言っていたのは「向こうが嫌なことは聞くな」ということです。話してくれた内容を追及するのではなく、地元で何があって、どういうふうになったか、を聞くということです。だから番組で生徒が言っていますが「おじいさんたちを追及するのはどうかと思う」と。生徒たちがそういうスタンスだからこそ、登戸研究所の元所員の方たちも心を開いたのだという気がします。

2. 陸軍登戸研究所の疎開

(1) 兵器行政本部作成の資料

登戸研究所の疎開内容についてはよく分かっていなかったのですが、兵器行政本部が作った1945（昭和20）年8月31日付の疎開に関する資料が出てきました。私達は登戸研究所の疎開先の本部は中沢村であると伴さんから聞いていました。ところがその資料には本部は宮田村であると書いてある。宮田村の調査は全然しておらず、私が発表した地元の記事に宮田村のことは載せていませんでした。それを見た神奈川県にお住いの真慶寺出身の方からお手紙をいただきまして、本部は宮田村の真慶寺であったということが書いてありました。当時、真慶寺の庭

には、中にお札がいっぱい詰まっていた箱があった。本部は給料を払わなければならないので、東京から給金を送ってもらっていたのです。そのため庭に箱がいっぱい積まれていて、相当お札があったと。また、戦後、資料を一週間かけて焼いたという話を聞きました。そこで、私達も真慶寺へ行ったところ、数十冊の本に「登戸研究所」というハンコが押してありました。それでやはり真慶寺が本部だったということがはっきりしました。

資料によると、長野県には本部・北安分室・中沢分室に分かれて疎開。本部が宮田村の真慶寺、北安分室は北安曇の松川村、中沢分室というのが駒ヶ根市の旧中沢村です。ほかに小川分室というのは兵庫県の小川村です。元の登戸研究所は全部疎開した後なので登戸分室ということになっています。

それぞれの内容は、本部は庶務や人事。北安分室というのは主に電波兵器の研究。中沢分室と小川分室は挺進部隊、女子挺身隊とは字が違いますが、簡単にいうとゲリラ戦のための焼夷剤や行動資材を作っていました。登戸分室は他機関との連絡や残務整理ということが書いてありました。

(2) 本土決戦に備え疎開した各研究機関

1945（昭和20）年6月沖縄が落ちると、その後は当然本土決戦になることは分かっていました。まず九州へ来る、その次は関東平野に来て、だいたい相模湾か九十九里浜から米軍は上陸して来る。最終的には大本営を守るために登戸研究所は長野県へ疎開してきた。その途中、製糸場がある群馬県の富岡に、登戸研究所と非常に関係のある陸軍中野学校、スパイのための実戦部隊ですが、その本部が来ます。そこは当然長野県の本営への通り道になっています。もう一つは葦崎から諏訪に入る道。そのあたりに軍の施設が非常にたくさん疎開してきている。やはり最終的には本土決戦に備えるための研究所の配置ではないかと考えられます。

(3) 長野県の疎開先・上伊那地方

登戸研究所の主な疎開先ですが、宮田村の真慶寺というお寺、第二科と第四科は中沢小学校。第二科は主に化学兵器の開発、第四科は製造部署です。だから実験などのメインは中沢小学校になっています。ほかにも東伊那小学校・赤穂小学校・飯島小学校とその分校といったところに第二科が分散疎開していました。

真慶寺が本部になっていて、ここに将校たちがいて色々会議をしていました。戦後、書類を一週間かけて焼いたということを言っているのです。膨大な資料があったはずですが、その資料が残っていれば今の研究に役立ったと思うのですが、登戸研究所関係の資料は焼却が命じられていたので、ほとんど現物が残っていません。たぶん川崎でも現物はそんなに残っていないと思います。まだ長野県の方が若干残っているものがありますが。

他には、工場となっていた中割協議所、今でいう集会所です。集会所の中身を全部取り除いて、ここで作っていたのは缶詰爆弾です。どういうものかと言うと、羊羹のような形で、高等科2年（いまの中学2年）の生徒たちがその中に爆薬を詰めて、登戸研究所の工員がその中に信管を入れていました。先程の学校日誌の中に爆発実験がでてきますが、あれはその爆弾を中学生に見せているのです。近くの大竜川に行ってどのくらい爆発するかという実験をしました。香花社という神社では、社務所や舞台で缶詰爆弾の旋盤をしていました。上割という地区の上割協議所の中でも缶詰爆弾を作っていました。

先程、登戸研究所の本部だった真慶寺で資料が見つかったといたしましたが、それが書籍です。「登戸研究所」とハンコが押してあります。登戸研究所の正式名称は第九陸軍技術研究所ですが、一切正式名称は使われていません。全て秘匿名である「登戸研究所」という名前を使っています。

(4) 長野県の疎開先・北安曇地方

もう一つの長野県の疎開地である北安曇に残る礎石の写真があります。ここに10mのパラボラアンテナを作り、そこから赤外線を出してロケットをその軌道で飛ばす。それによってB29を撃墜する、そういう設備をつくっていました。

ここは第一科ですが、第一科は風船爆弾の放球を1945（昭和20）年3月までおこなっていき、それが終わってすぐこの地区に来ています。他の施設は全部既存の施設を借り上げていたのに対して、松川の北安分室だけは研究所を新たに作っています。研究を本格的にやろうとしていたということです。別の方の証言ですが、これは大本営を守るためにB29を撃墜するための設備であるというようなことを聞きました。その設備のための礎石ですが、パラボラアンテナは完成しませんでした。10mの大きさのものを途中まで作って、米軍が来るというので近くの本崎湖に沈めたそうです。現物は見つかりませんが、探せばもしかしたらあるかもしれません。この礎石も現在はありませんので、これは当時の写真を持っている方からいただいたものです。一般的に殺人光線と言われていますが、極超短波とか超短波とかの研究をしていたという証言もあります。

3. 終戦

(1) 陸軍省軍事課特殊研究処理要領

なぜ資料がないのかというのは「陸軍省軍事課特殊研究処理要領」に基づいています。1945（昭和20）年8月15日に陸軍省の軍事課から、特殊研究の書類を処分しなさい、という通達があります。敵に証拠を得られることを不利とする特殊研究はすべて証拠を隠滅するというもので

す。そこですぐ焼却作業に入りました。

本部でも一週間かけて焼却し、中沢でもグラウンドに大きい穴を掘って、研究器具とか爆薬も色々入れているうちに大爆発が起こったということが当時見ていた人の証言から分かります。戦後すぐ、焼却やグラウンドに穴を掘って埋めるという作業に追われたそうです。北安曇ではグラウンドに大型の工作車、トラックのようなものでロケットなどを製造するための機械があったのですが、そういう大きいトラックなども、近所の人をみんな招集して埋めたそうです。米軍がきてそれを掘り返したという記録も学校日誌に載っています。

「陸軍省軍事課特殊研究処理要領」の本文を見ていただくと、一番先にあげられているのがふ号兵器及び登戸研究所関係です。「ふ号兵器」というのは登戸研究所で開発していた風船爆弾です。登戸研究所関係はすぐ処置しなさいということで、一番先に登戸研究所がでてきます。その次に出てくるのが731部隊と100部隊。100部隊と言うのはあまり聞いたことがないと思いますが、関東軍の軍馬防疫廠という馬の防疫関係をしているところです。ここでも人体実験があったという話も聞いておりますが、731部隊は人体実験で有名になっているところです。あと糧秣本廠1号。これは秘匿名で、植物を枯らす細菌兵器だと思っています。

このような通達が出されたものですから、登戸研究所関係の資料はほとんど残っていない。この通達によって全部処分されたということです。

(2) 中沢国民学校 GHQ の接收

中沢も最終的に全部庭に埋めたり、焼却したりしましたが、米軍は登戸研究所の疎開先ということはすでに把握していましたので、CICの441支隊という日系二世などを中心とした調査・聞き取りをする部隊がきました。

長野県に進駐軍が最初に来たのは1945（昭和20）年9月中旬といわれております。登戸研究所関係で最初に米軍が来たのは松川小学校（当時の松川国民学校）で10月5日に来ました。かなり早い時期だと思います。そのうちだんだんGHQの組織が整ってきますので、駒ヶ根方面へ来たのは10月25日です。これは2、3年前資料館の人たちと一緒に調べた結果、中沢小学校（当時の中沢国民学校）に10月25日にGHQが接收に来たという資料がありました。赤穂小学校などの記録を見ても、同じ25日に来ています。その頃にはすべての登戸研究所関係の所へ調査に来ています。

なぜ登戸研究所が上伊那に来たのか、それは北澤隆次さんという方が中沢の出身だった関係で来たということを言われています。また、長野県にきたのは本土決戦に備えるためである、というのが普通に考えられることではないかと思っています。

おわりに

短い時間で簡単に説明しましたが、とにかく生徒たちの活動がなければ資料館もできなかったし、当時の関係者も話してくれなかったと思います。実は私も25年も携わることになるとは当時は思っていなかったのですが、今日もお話しする機会をいただいたということは非常にありがたいと思っています。長野県の高校がこうした活動をしていることの一部をご紹介できたと思います。ありがとうございました。

第二部 パネルディスカッション

[パネリスト] 木下健蔵氏（長野県辰野高等学校教諭[※]）※2016年3月26日のパネルディスカッション当時
渡辺賢二（平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員）
山田 朗（文学部教授・平和教育登戸研究所資料館長）

山田：木下先生，ありがとうございました。これから第二部のパネルディスカッションとなりますが，木下先生から伺ったことを含めて，簡単にまとめさせていただきます。

本土決戦に際して，登戸研究所はいくつかの地域に分散疎開をすることになります。疎開と言っても，これはあくまでも本土決戦に備えて，場合によっては本土決戦を有利に展開するために，特殊な兵器を製造する所，その要員を養成する所が，大本営として準備されていた長野県松代を中心とした地域に移転をしていきます。

長野県上伊那地区には登戸研究所の第二科・第四科。実際に遊撃戦部隊が使う兵器，謀略用の放火道具などを作る所が疎開します。「く号兵器」（電波兵器）を中心とした開発部門は上伊那より北の松川村，池田町に置かれました。

上伊那地区を中心にみていきますと，本部が宮田村の真慶寺にあります。中沢国民学校（現中沢小学校）・伊那村国民学校（現 東伊那小学校）・赤穂国民学校（現 赤穂小学校）・飯島国民学校（現 飯島小学校），こうした学校が工場になって，実際に武器の生産がおこなわれることになりました。学校だけではなく，神社やお寺も分工場にしていました。

伴さんを中心に木下先生と高校生を写した写真は1989（平成元）年8月9日の日付です。1989年は登戸研究所の様々な秘密が明かされた年でした。木下先生と高校生たちの活動について，資料館では大きなパネル一面を使って展示しています。その活動については『消された秘密戦研究所』と『高校生が追う陸軍登戸研究所』⁽⁵⁾にまとめられていますが，高校生たちが調査をして登戸研究所研究のスタートになる本ができたということは，すごいことです。

以上が概要です。これから渡辺先生にお話ししたいと思っています。渡辺先生は法政二高

の教員をしていた時代に、木下先生と共に登戸研究所の調査をおこないました。特に川崎ではいち早く登戸研究所の存在に注目されて、高校生たちと共に調査活動にあたってこられた先生です。

渡辺：渡辺です。よろしくお願ひします。今回のテーマである、長野県に疎開した登戸研究所の実態と、それを掘り起こした高校生たちに焦点をあてて話を進めさせていただきます。最初に、登戸研究所に取り組んできた歴史を振り返ります。

私が登戸研究所に接したのが、『陸軍贖幣作戦』⁽⁶⁾という山本憲蔵氏の本が出版され、この本をもとにNHK「歴史への招待」で登戸研究所において偽札がつくられていたという番組が放送されて驚いたことがきっかけです。さらに斎藤充功さんというジャーナリストが登戸研究所の関係者を追って取材した本⁽⁷⁾を読んでまた驚きました。それが今から31年位前に私が初めて接した登戸研究所です。

ちょうどその31年前、1985（昭和60）年に川崎市が教育委員会主催の平和教育学級を設置することになり、1986（昭和61）年から私が勤めていた川崎市中原区で市民参加の平和教育学級が始まりました。そこで私は地域の戦争について学ぼうという提案をして、クラスの高校生も一緒に連れて行って参加しました。その時、登戸研究所というのが有名になっているので行ってみよう、ということで明治大学を訪れました。そこには動物慰霊碑とか色々なものはあるが、一切何の資料もない。登戸研究所について書かれた本はあるが、どれだけ信憑性があるかまだわからない。

そんな時にある新聞記者が、この生田周辺で戦時中、稲が実らなかった時期があった。調べてみたらどうか、という提案をされました。そこで私たちは1987（昭和62）年、高校生を連れて現場を徹底して見ることにしました。当時はまだ、たくさんの木造の建物がありましたので何回か見学会を実施しましたが、誰も名乗り出てくれる人がいない。防衛庁（現・防衛省）防衛研究所で調べても資料が何もないので、すぐに壁にぶつかりました。

何度も見学会をやっていれば登戸研究所に勤めていた人が来るかもしれない、ということで見学会の開催案内を新聞に載せてもらいました。すると5回目の時に、高齢の方がついて来たのです。それが登戸研究所に勤めていた井上さんという方でした。この人との出会いが無ければ我々は調査をやめていました。この時1987（昭和62）年ですが、井上さんに「随分経つのに誰も話をしてくれない」と言うと、「みんなで墓場まで持っていこうと言って解散したんだ」と教えてくれました。資料がないだけでなく、勤めた人が大勢いるのに語らない世界でした。その事について「最近はどうですか」と聞くと、「戦後40年過ぎてくると、だんだん苦しくなってきたね。昔登戸研究所に勤めていた近所の人たちはお互いに挨拶するようになった。それで名簿をつくりだした。」と言うので、99名の名前が書かれた名簿を提供してもらいました。しかし「こ

の人に電話をすれば話してくれますか」と聞くと、「いや、やめてくれ。絶対みんな話さないから」と言うことでした。

困っていたら、一緒に参加していた高校生からいい案が出ました。それは「登戸研究所について話をしてくれるか尋ねるアンケートを出そう」ということでした。そこで川崎市教育委員会の名前を借りて99名にアンケートを出したところ、26名の方から返事がきました。その中の15才で登戸研究所に勤めたという女性が、アンケートに自分は資料を持っている、と書いていました。どこに行ってもなかった資料があるというのです。たいした内容ではないだろうと思っていましたが、今、資料館展示室にも複製が展示してある『雑書綴』という資料でした。これは登戸研究所第二科という生物化学兵器を扱っていた科の資料です。極秘のものはないけれども、何をやっていたかはこれを見れば全部わかります。960数点の綴りです。これをみんなで分析して、登戸研究所の実態に迫ることができた最初の資料でした。こうしたことをきっかけとして市民と高校生も参加するグループの『私の街から戦争が見えた』⁽⁸⁾が1989年に出版されました。

1987年、88年は色々と調べて、1989年には法政二高でも平和ゼミナールが動き出して『雑書綴』の分析にとりかかりました。それがテレビ番組で取り上げられたところ、木下さんから電話があり「自分たちも登戸研究所を調べています。一緒に交流しましょう」という話になりました。まさに偶然の積み重なりの中かで登戸研究所が結びついたのでした。

登戸研究所本部が1945（昭和20）年5月から駒ヶ根に転居したということが分かり、高校生同士が聞き取りに入るということになりました。しかし一番の問題は、関係者が口を開かない事でした。私たちは『雑書綴』を見て、伴さんにも接触を試みましたがなかなか会ってくれませんでした。その背景には、先程木下さんがおっしゃったような、私たちの聞き取り方に問題があるのではないのか、ということです。悪いことをした、という前提で聞いたら駄目だろうと。だから高校生には真っ白な状態で、話すのを待つという形で聞きに行こう、と呼びかけました。そうすると関係者は「大人には話さないが、高校生には話そう」と、合言葉のように皆さん語ってくれました。これは本当に驚くべきことでした。川崎でも長野でも、色々なことを聞き取り、そして資料を提供されるようになる。こうした経過があったということを、先程の木下さんの話の補足とさせていただきます。

そして木下さんたちが聞き取りに入ります。1989（平成元）年、高校生が登戸研究所の聞き取りをしたいと来た時、どんな気持ちで、どんな反応で、取り組み始めたのでしょうか。

木下：最初は、ただ文化祭で生徒会の発表をしたいということでした。生徒会役員だった彼女たちが平和ゼミナールという会議に出席して、登戸研究所のことを聞いてきたようです。私は登戸研究所と聞いても何も分からなかったのですが、一緒に聞き取ることになりました。しか

し、どこから手を付けていいのかわからず、片端から誰か登戸研究所のことを知りませんかと聞いてまわることから始まりました。

渡辺：その時、一緒に参加された高校生だった池田幸代さんが今日お見えですので、その時の感想をちょっと話していただきましょう。

池田：みなさんこんにちは。ご紹介いただきました、赤穂高校平和ゼミナールだった池田と申します。木下先生の所に押し掛けて行った女子高生の一人です。当時、上伊那の平和ゼミナールで活動をしていて、そこで帝銀事件⁽⁹⁾のこと、それから陸軍登戸研究所のことを知りました。地元のことなので調査しようと思い、木下先生の所に押し掛けて行ってお願いをしました。同じ生徒会の北原さんたちと一緒に調査をすることになりました。

その時の経験は今でも生きています。私は今、参議院議員秘書の仕事をしていますが、日本はまた戦争を始めるような時代になっていると感じています。私たちは一緒に研究をして、二度と戦争を起こさないで欲しいということを、伴さんやその先達から託されたのだと思っていますので、ここで戦争させないために、しっかり声を上げていきたいと思っています。

渡辺：高校時代にそういう体験をすると、それが生涯の生き方としているということが、今の話からうかがえると思います。

それではまた木下さんに聞きたいと思います。私たちが話を聞く時には、悪いことをしていたのでは、という先見的な気持ちでいたら駄目だった。高校生はどのように話を聞いて、伴さんや杉山さんが心を開いてくれたのか。その辺りの取り組みについて、もう少し質問します。

木下：やはり、私たちは何も知らなかったということが良かったわけです。私は社会科の教員ではありませんし、登戸研究所のことも全く知りませんでした。とにかく話してくれることは何でも素直に聞こう、という姿勢が一番でした。

初めはやはりなかなか話してくれません。文化祭で当時のことを調べて発表したいと言っても、最初は当たり障りのない話しかしていません。インタビューのようにするとなかなか話してくれませんので、お茶を飲みながら色々話すことをただ聞いていました。段々と人間関係を築いていくのです。

杉山さんは「一切話をしない、絶対無理だ」ということで、初めのうちは外ですぐ帰されましたが、そのうち家に入れてくれて、カボチャをごちそうになったりしました。お茶を飲むようになり、登戸研究所のことではない、一般的な戦争の話の聞いたりしているうちに、登戸研究所の話もするようになりました。伴さんがこういう話をしてくれましたけれど、これはどう

なのですか、とか言っていると写真などを出してくれました。

一番注意したのは、相手の嫌な事は聞かないこと。メディアとか、私もそうですが、人体実験はどうですか、とか知りたいことをまず聞いてしまいます。私は高校生たちに、相手が嫌な事、喋りたくない事は聞かないようにあらかじめ言っておいたので、高校生たちは聞きませんでした。そういうことで生徒たちが全然野心がなくて、純粋に当時の事を知りたがっていることが通じたのです。もう一つは、1989年は昭和から平成に変わった年でした。話さないと決めていても、心の底では誰かに話しておきたいという部分があったと思っています。高校生がその部分をうまく引き出してくれて瓦解に至った。やはりまず、人間関係をつくることから始めたということです。

渡辺：大変大事な問題だと思います。私も同じ思いでした。伴さんも、高校生と一緒にいくと、私の方を見ないで高校生の方を見るのです。それで「あの戦争、君はどこであったか知っているか」という質問を高校生にします。高校生は私たちから教わったように「アメリカです」なんて言うと無然とします。なぜなら、後で分かることですが、中国との戦争で何とかしたかったから秘密戦兵器を開発したのだ、という複雑な思いが彼らのなかにはあった。口にはしないけれども、歴史が伝わってないという思いがあったと思います。

調査が行き詰ると、逆に伴さんから資料が提供されることもありました。その一つが濾過筒です。この濾過筒が提供されて、解明されていく過程をもう少し話していただけますでしょうか。

木下：伴さんに「庭にちょっと面白いものがあるから、見ていきなさい」と言われて行ってみました。最初に濾過筒を目にした時は何なのか全然分からなかったが、「軍事秘密」という刻印が全部に書いてある。「陸軍のなにか重要なものですか」と聞くと「731部隊で使ったものだ」ということでした。どういうふうに使ったかは私もよく分からなかったが、「ニホンロスイキ」と書いてあって、もう一個は渡辺先生の生徒さんたちが色々調べて「松風」と書いてあることから、どちらも今もある会社が作ったものだと分かりました。渡辺先生や生徒たちと一緒に日本濾水機の会社に見学に行って、社長さんに色々尋ねました。当然、日本濾水機でも当時の現物は損なわれて持っていないということでした。伴さんがどういう理由で所持していたのか分かりませんが、大量に濾過筒があったということは、もしかしたら細菌戦を想定していたのではないかと、ということも考えられます。

山田：今、木下先生から濾過筒の話がありましたが、現物はほとんど残っていません。軍事秘密ということで、戦後日本軍の手で徹底的に破壊されています。また、残っていたとしても

GHQの命令で破壊されている。破片は出てきますが、どこからも完品では出てこないのに長野だけは大量に出てきた。長野県のように水のいい所では本来濾水機は必要ない。水が汚染されるということを前提にして考えないと、こんなに大量に濾過筒を持ち込むことは考えられない。本土決戦に際して、細菌戦もありえるということ想定していた、一つの証拠なのかなというふうにも考えています。これは裏付ける文書資料がありませんので、確定的な事は言えません。ただ大量に濾過筒の現物が残っていたということ自体が、極めて珍しい事例です。

渡辺：濾過筒について私の方で概要を話しますと、木下先生との交流のなかで、木下先生のグループから濾過筒が持ち込まれました。これは水を濾過するもので、日本濾水機という会社で作られたものであることが分かり、その会社に行ってみることにになりました。私は最初、同じ日本濾水機でも違う会社ではないかと思っていましたが、社長室に通されて「君たち高校生が濾過筒を調べに来たのは、進駐軍以来だ」と言われてびっくりしました。進駐軍はちゃんと調べていたが、戦後日本人は誰も石井式濾水機や濾過筒について調査研究をしていなかったものを、高校生が調べに行ったのです。

それからもう一つ高校生から学んだことは、「これは731部隊のものではない」と私が言ったら、高校生は「先生、これは兵器にも道具にもなるのだから731部隊とも関係あるのではないですか」と言うのです。日本濾水機の社長さんに聞くと「これは自分たちが731部隊より前、関東大震災の時に開発し特許をとっていたものだ。それを戦争中に持っていかれたのだ。戦後も水を濾過するために作り続けた」ということを話してくれました。こういう兵器にも道具にもなるというような発想を私は高校生から学んだと痛感しています。

こうしたことをふまえて、長野のことに移ります。1945（昭和20）年4月29日天長節の日をもって風船爆弾作戦が中止され、登戸研究所本部が長野に移りました。長野県での登戸研究所の実態を明らかにしたのが、木下先生の個人のグループと、そのきっかけを作った長野県の高中生たちでした。木下先生は平和ゼミナールの生徒から触発されて調査研究に入り、『消された秘密戦研究所』という本を出されました。この本をまとめた経緯や気持ちを補足していただきながら、長野県における登戸研究所の活動をどのように語り継いでいくのかをお話してください。

木下：私は本を出版する予定はありませんでした。平和ゼミナールは学校の決められたサークルではないので活動資金がありません。聞き取り調査へ行くにも、生徒を連れて行っても旅費が出ず全部自腹でした。そこでクラブにしてもらい、生徒の引率で出張ということで行くようになりました。それまでは『上伊那地方における「陸軍登戸研究所」の実態調査について』という資料を作り、8月広島の平和集会などで販売して資金をカンパしてもらい活動をしていま

した。

本を出版した理由の一つが、こうしてせっかく作った資料があり、また、地域の歴史雑誌に書いたものがあったことです。そして一番の理由は『駒ヶ根市誌』です。市の歴史に4行しか登戸研究所に関する記載がなかった。これだけのことを4行だけですましてはいけないのではないかと思いました。そこで、私も凝り性な性格なものですから、もう少し調べたいと思いました。今まで出版された登戸研究所関連の本は第二科の内容がほとんど出ていません。伴さんに提供していただいた資料とともに、地域の歴史として残していかなければいけないと思い、ずっとまとめていました。

もう一つの理由は、登戸研究所の歴史的な位置付けに触れた本がなかったからです。図書館へ行き、大正時代からの官報をずっと見ていて、どういう形で登戸研究所が編成されたかを調べようと思いました。ところが登戸研究所に関する記載がないのです。スパイの研究所に関する記述を載せること自体があり得ないことです。そういうことを知り、歴史的な位置付けとか、体系とか、当時の状況とかをまとめたものを、信濃毎日新聞の記者の知り合いから本にしないかと言われて出版することになりました。登戸研究所のことを体系的にまとめた最初の本だと、自分でも思っています。

ただ聞いたことを書くだけでは裏付けがありません。きちんとした証拠がやはり必要だと思います。そのためには裏付けとなる情報、どういうものがあつたのかをきちんと調べて本にしておきたかった。一番は、4行しかなかった歴史を残さなければいけないということです。長野県の歴史として貴重なもので、大本営は非常に有名ですが、登戸研究所は県内でも知っている人がほとんどいない。地域でもいない。やはりこれはきちんと残さなければいけない。陸軍が終戦時、最初に処分しなければいけないとしたのが登戸研究所ですから、それほど重要な施設のことを県の歴史として何も残っていない。残さなければいけないと思いました。

渡辺：どうもありがとうございました。今年9月頃には新しい登戸研究所の本を出される予定だそうです。ご期待ください。

木下さんのところには駒ヶ根周辺の資料が集まり、家中に資料があふれました。川崎では法政二高の研究室と私の家に、伴さんをはじめ、多くの人達の資料が提供されてきました。これをどうするのか。これは資料館を造るしかない、ということで保存運動、資料館づくりにずっとその後関わって、今の資料館ができました。資料館に行ってくださいと分かりますが、木下健蔵提供・渡辺賢二提供という資料が結構多くあるのはそのためです。

最後に山田先生にまとめていただきますが、その前に伴さんのことに少し触れておきます。伴さんは高校生が来るまで、人体実験のことについて一切言っていない。しかし高校生から触発されて、彼は原稿を書きます⁽¹⁰⁾。その生原稿800数枚の綴りは全て、この資料館にあります。

その中で、彼は自分の言葉で人体実験したことを認めます。たとえ戦争中といえども、捕虜といえども、人体実験してしまった。申し訳ない。冥福を祈る。という文言を書きました⁽¹¹⁾。そして奥さんにも「お前にも長い間すまなかった」と初めて謝ったのです。それまでは、国のために尽くしたという思いや、話してはいけないと悶々としていたのが、人間の世界に帰ってきてくれたというのが奥さんの言葉でした。この原稿以外にも、資料館には伴さんの資料が多く残っています。

最後に、疎開の問題と資料館ができたことを踏まえて、高校生が活動した意義などを山田先生にまとめてもらいます。

山田：私たちも、歴史に埋もれた、隠された歴史の事実をどう発掘し、さらに語り継いでいくかという木下先生・渡辺先生の活動に大変触発されています。どんな大きな事件であっても、自然に記憶は継承されません。特に秘密戦など、戦争に関することは、誰かが意識的に掘り下げて、事実を掘りおこさないとすぐに埋もれてしまう。それを本や資料館という目に見える形で、歴史を継承していく作業がおこなわれないと、たちまちのうちに消え去ってしまうものです。戦争が終わって70年経ちますと、戦争の記憶の継承が難しくなっています。家族のなかで戦争体験者はどんどん少なくなっていく。家の中で戦争の記憶が継承されることが極めて少なくなっている。しかし、どんな土地にでも、この生田の土地にも、長野県の上伊那の土地にも、土地に刻まれた歴史の記憶がある。自分が生きている、あるいは働いている、勉強している。まさにその土地に戦争の痕跡が残っている。そこに立っている自分も戦争と無関係ではなく、土地の歴史を通じて戦争とつながっているという意識を少しでも多くの人々が持てば、歴史の記憶の継承は何らかの形でおきてくると思いますし、今日、木下先生にうかがいましたように、高校生たちの地元の歴史を純粋な気持ちで調べたいというその気持ちが、多くの人を動かしたということです。これは歴史研究あるいは戦争の記憶の継承の原点をここに見つけることができると思います。

渡辺：それでは質問があれば挙手をしていただいて、簡単に質問をお願いします。

質問者1：日本のスパイ活動において、戦争を回避するための工作もしくは色々な国と仲良くなるような工作を、登戸研究所や中野学校ではやっていなかったのか。もしそうした工作をしていたとしても、戦争に陥ったのはなぜなのかを知りたい。

渡辺：今日のテーマとはちょっと違いますが、山田先生からお願いします。

山田：日本が戦争に突き進んでしまったのは、中国の権益を確保したい、あるいは独占したいと考えたことが一番大きい。当然中国をめぐるには欧米列強の権益もあるので、日本が進出するほど欧米の権益を脅かすことになって、中国に対して欧米列強が支援をする。だから戦争がなかなか終わらない、どんどん日本は踏み込んでいく、さらに欧米列強が支援をする。その悪循環に陥ってしまったということですから、対英米戦争というのが最後の段階ですが、大本は中国に日本が踏み込みすぎたということです。自分の権益を守ろうではなく、拡大しようとしたところに最大の原因があったと思います。秘密戦に関わる人のなかには、東アジア解放のために活動をしていた人もいますが、結果として欧米列強に日本がとって替わるだけで、主観的なアジア解放論に陥ってしまったのだと思います。このことについては秘密戦をさらに解明していく中で実態を明らかにしていきたいと思います。

質問者2：先日、731部隊のドキュメンタリーを撮影する中国人監督と共に資料館に行きました。中国の人たちとのこれからのあり方において、資料館の存在は大事だと思うし、若い監督がどのようなドキュメンタリーを作るのか、興味があります。今日のお話で、高校生が端緒となったことはとても大事なことだと思います。また日本の高校生と中国や朝鮮半島の高校生との繋がりを持つことができればいいと思いながら、参加させてもらいましたが、そういう展望はどうでしょうか。資料館のことを含めてお話ししていただけたらと思います。

山田：731部隊にしても登戸研究所にしても、人体実験に焦点がいきます。それを解明することは重要なことですが、731をみても登戸をみても、戦争の本質というものはともに隠されています。戦争は一応ルールがあるように見えますが、結局手段を選ばないということになってしまう。しかもやっているうちに人間の正常な感覚というのが失われてしまう。しかし、そのことにやってる方は気が付かない。伴さんにしてみても、本当にまじめな研究者であった人が、大義名分のために戦争に勝つために人体実験をしても、何にも感じなくなってしまう。資料館の展示にもありますが「はじめは嫌であったが、慣れると一つの趣味になった」こういう言い方をしている。普通だったら考えられないことですが、そういうふう人間をしてしまうところに、戦争の恐ろしさがあるのではないかと思います。

質問者3：私は今、東京に住んでいますが、長野県出身で、結婚するまで長野にいて、ちょうど20歳の時に伴さんのお宅に残されていた資料というのを信濃毎日新聞とかで見て、とてもセンセーショナルなことだと思いました。二つ質問があります。聞き取り調査で話をするまで、あるいは資料を提供してくれるまでにどれくらいの時間がかかったのか。そして、今の高校生たちについて木下先生がどうお考えなのか、教えてください。

木下：最初は高校生3名と始めました。私も駒ヶ根に転勤して2年目で、地理に明るくない。ましてや天竜川の東側では屋号で呼ぶので、話を聞いてもどこの家のことか分からない。そのうちクラブを辞めた子たちが手伝ってくれるようになりました。その子たちは屋号がすぐ分かるし、その家のこともよく知っているので、調査する時はよかったです。

伴さんの時は、伴さんは夏だけ長野に来るので、アポを取ったのが7月終わり位でした。伴さんがこちらに来ている時に地元の新聞にたまたま登戸研究所の記事が載って、それを偶然伴さんが読んでいたのです。8月5日に行って、最初は何もせず帰ってききましたが、夏休み中にはいろいろ話をしてくれるようになり、親しくしてくれるようになりました。

当時は、生徒を車に乗せて行ってもうるさく言う人いませんでした。今は事故を起こしたら責任問題になるからと、非常に厳しくなりできません。教師も今は暇がありません。聞き取りも当時の関係者がいたちょうど最後の時期です。そういう、色々な偶然が重なり、私も一緒に行くうちに興味を持って調べ出しました。

そういうことで、伴さんが話してくれるまでそんなにはかかりませんでした。ただし、杉山さんは何回も通いました。やはりなかなかすぐには話してくれない。でも伴さんが話してくれたという、話をしてくれました。人が話したならいいかって。杉山さんが話してくれたのは、奇跡だとみんな言います。それほど誰にも話したことがない。

ですから1、2か月でなんとか。夏休み中は毎日のようにおじゃましましたので、だんだん親しくなっていったのだと思います。

渡辺：ちょっと補足しますと、『雑書綴』を提供してくれた人は第二科という伴さんが中心となっている科にいた人です。資料を提供するかどうかは、伴さんに承諾を得ないと提供できなかったそうです。伴さんに承諾を得て、この『私の街から戦争が見えた』⁽⁸⁾という本を出すときにも承諾を得ていますので、私はこの本が出た時にすぐに伴さんに差し上げました。聞き取りの時も伴さんの家にこの本があったと思います。この本が伴さんの心を開く一つのきっかけになったのかな、というふうにも思います。ですからすぐに話したわけではなく、話していいのか関係者の中では話し合いがあったのではないかと想像されます。

質問者4：先程山田先生がおっしゃった、地域に刻まれた戦争の歴史を、どうやって若い人たちに伝えていくかということとはとても重要な問題だと思います。当時の駒ヶ根の高校生が本当に真実を知りたいというところから始まって、解き明かしたように、当時の長野には平和ゼミナールという高校を超えた生徒間の組織があったということがすごく大きいのではないかと思います。しかし実際には長野県で登戸研究所の疎開地跡の事を知っている県民は少ない。若い世代に伝えていく時に、駒ヶ根市教育委員会とか川崎市教育委員会が非常に大きな影響を与え

るのではないか思うのです。行政の方ではどのような姿勢を示しているかをお聞きしたい。

木下：協力はあまりよくありません。地元で資料館をつくってほしい、残したいと言ったのですが、結局は実現しなかった。それで本を出したということもあります。やはりなかなかそういう意識を持ってもらうことが少ないし、どんどんメンバーも変わっていきますし。協力的な方もいますが、なかには学校の資料は個人情報が入っているから見せられないと言われます。昔はそういうことは言われてなかったのですが。地域としてなんとか残そうと、写真などの資料は寄贈しましたが、先日戦後70周年で25年ぶりに展示会を開催してくれました。昔も一回開催しています。そういうことに関心を持っている方は少ないですね。生徒についても、最初から意識があるというわけではなくて、色々な話を聞くうちに、ということが非常に多いと思います。最初はおもしろそうだな、という程度で、話を聞いていくうちに変わっていく。

最近も組織づくりをしたのですが、途切れてしまいました。今の子たちに対して、なかなか難しい。周りの環境も、集会を持つこと自体禁止しているところもありますので。そういう難しさもあります。

渡辺：川崎市の事も詳しくは知りませんが、登戸研究所に関しては高く評価していると思います。産業観光課は産業観光資源として位置付けていますし、教育委員会もしっかりと位置付ける方向性を持っているようです。市民がその気になり、高校生が動けば可能性は新たに出てくるのではないかと思います。そういう意味で明治大学平和教育登戸研究所資料館の役割は決定的だと思いますので、最後に山田館長から決意表明を含めて話をさせていただきたいと思います。

山田：戦争に関わるのが、マイナスイメージでとらわれていて、それを残していくことが地域の振興や、地域の文化向上につながるのではないかという誤解があります。むしろそういうものがあることで、色々な人が訪れ、ものを考えるようになる。登戸研究所があった生田の地は明治大学の農学部・理工学部のキャンパスになっていて、資料館ができる前は学生たちも都市伝説みたいなものしか知らなかった。弥心神社の下には死体が埋まっているだとか、もちろん嘘ですが。それがきちんと伝えられていくと、また変わっていきます。技術と戦争との関わりのように、人間が変わっていってしまう戦争について、少しだけでも考えるきっかけができるようになりました。各地域でもものを考えるきっかけ、まさに歴史を見るということは、現在を見るということ。歴史を通じて過去があり、その土台の上に現在があるということですから。意味合いをさらに考えるためには、現在と過去をきちんとおさえていく。決してそれはマイナスの遺産ではなく、未来をつくるための積極的なものとして、ポジティブなものとしてとらえていけば、活用の仕方があるのではないかと思います。そういう役割を資料館も担って

いければと思っております。6年目を迎えましたけれども、今後とも皆様のご支援をいただきまして資料館を充実させていきたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。どうもありがとうございました。

〔終〕

注

- (1) 木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社，1994年）
- (2) 信越放送SBC特集「陸軍登戸研究所 高校生が見た戦争」（1990年10月30日放送）
- (3) 長野県赤穂高等学校平和ゼミナール『長野県赤穂高等学校平和ゼミナール報告集 上伊那地方における「陸軍登戸研究所」の実態調査について』
- (4) 駒ヶ根市誌編さん委員会編『駒ヶ根市誌 現代編上巻』（駒ヶ根市誌刊行会，1979年）
- (5) 赤穂高校平和ゼミナール・法政二高平和研究会編『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会，1991年）
- (6) 山本憲蔵『陸軍贋幣作戦』（徳間書店，1984年）
- (7) 斎藤充功「ドキュメント陸軍登戸研究所」（『週刊時事』1986年9月20日号～1987年3月28日号連載），のちに斎藤充功『謀略戦 ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社，1987年）として単行本化
- (8) 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた—謀略秘密基地 登戸研究所の謎を追う—』（教育史料出版会，1989年）
- (9) 1948（昭和23）年に帝国銀行でおこった毒物による集団殺人事件。使用された毒物から元登戸研究所関係者の関与が疑われた。
- (10) 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版，2001年）
- (11) 前掲『陸軍登戸研究所の真実』 82頁

〔追記〕

本稿は、2016年3月26日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールにて開催された第6回企画展記念第三回講演会「長野県に疎開した登戸研究所と高校生達との調査」の書き起こしに加筆・修正したものです。なお、肩書きは2016年3月26日時点のものです。